

2021年度 活動報告書

景観から読み取る
越前大野の水と神社
そして暮らし

関西大学環境都市工学部建築学科
住環境デザイン研究室
岡絵理子・宮地茉莉

はじめに

この冬は、大阪でも越前大野の気温や積雪に関するニュースがよく報道されました。この冬一番の寒さを記録した、 -9°C での美しい霧氷の景色を映像で見えていました。コロナ禍が落ち着くのを待って活動開始と思っていましたが、大阪から伺うには、なかなか厳しい状況でした。それでも、研究室で伺った日の翌日は雨上がりで、素晴らしい雲海を大野城から楽しむことができました。

この様に、越前大野は自然・気候と地形が独特で、ここでしかみることのできない景色を体験することができる場所だということを感じました。

去年は、越前大野の盆地に点在する多くの神社を訪ね歩き、マップを作成しました。他都市と比べ、神社の数が多いのも越前大野の特徴だと思います。

今年はそのマップを利用して、高校生や大野の方々と共にサイクリングを、と考えていましたがなかなか叶わず。再度、研究室の新しいメンバーと神社を巡りました。去年の報告会の時に、関西大学楠見先生のご発表を伺い、地下水と神社の関係が気になっていました。そんなとき、「越前おおの水のがっこう」を訪ねた学生から、地下水の流れている場所、深さと神社が関係あるのでは、「本願清水イトヨの里」で見たお清水で冷やしたビールを飲んでいる写真がとてもよかった、との声もあり、これらについて調べてみることにしました。

論文とするには拙い内容ですが、学生たちの目に映った「水と神社、そして暮らし」をお楽しみください。

2022年3月

関西大学環境都市工学部建築学科
教授 岡 絵理子

1. 越前大野の城下町での水との生活（「大野市史・民族編¹」から）

本章では、大野市史から、城下町における水との生活に関わる部分を抜き出して記述し、水との生活を概観する。

（1）生活用排水の整備（p.118）

大野盆地を南北に流れる赤根川と清滝川との間には木本扇状地が広がり、扇端部に位置する市街地では、清滝川の伏流水など、地下水が豊富に湧き出し町を潤してきた。中でも市街地の南部に位置する本願清水は、町の生活用水の水源として整備され、一番町から五番町の各道筋では道路の中央を、寺町では道路の片側を、それぞれ南から北へ流された。

この本願清水は町の生活用水として江戸時代から徹底して管理されていたようで、安永三年（1774）の本願清水の立札に次の文言が書かれている。

一、此清水まはりにて土砂ともに取りましき事
一、馬牛あらましく候、何に而もけかわらハしきものすて間敷事
一、町用水之外わき江水切おとす間敷事
右之趣堅可相守者也
牛九月
安永三年牛七月改建候、如右之

毎年清水の浄化をしていた。江戸時代には各家庭に地下水を組み上げる井戸ができた。大正時代には木製の手押しポンプが普及し始め、ナガシ湯の様子も改善された一方、背割り排水路は、一番町と二番町の間、二番町と三番町の間というように、各町並みの裏側を上水路と並行して流された。

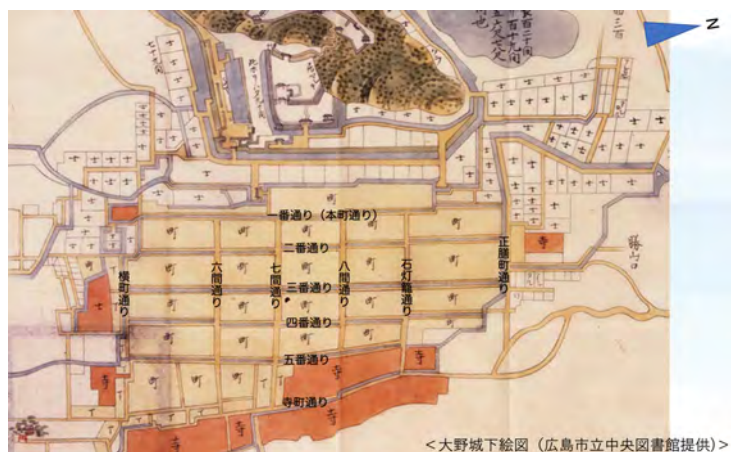


図1 大野城下の道路名称

¹ 「大野市史（第13巻）民族編、大野市史編さん委員会、2008年3月31日発行。対象とした時代は、昭和30年代後半（高度経済成長期以前）の生活の様子聞き取り調査の結果を元としている。

(2) 通りの整備 (p.120)

大野藩では、大火ごとにカヤぶき屋根を板ぶきに順次ふき替えさせた。また、大野町長の岡気一は、明治三十二年(1899)の大火の教訓を生かし、翌年、六間通りと石灯笼小路を防火帯として拡幅し、通り両側にコウヤマキ、サクラ、ヤナギなど植樹した。各町内の通り中央を南北に流れる生活用水も、融雪・防火用水として活用された。

(3) 用水と生活 (p.30、p.44)

大野でも用水や泉のほとりで洗濯をした。手で振ったり、もみ洗い、足で踏み洗いした後、石の上に洗濯物を置いて木の棒を使ってかるくたたいた。また、板やはけなどの道具を用いてあらった。

それぞれの地区を流れる用水や泉では、野菜の洗い場所や洗濯場をそれぞれ指定し区別されていた。朝の一時主婦が洗濯に集まると、井戸端会議が賑やかになされた。

ころ煮に使うサトイモは、皮をむかずに樋の中でごろごろとこすり合わせて洗ったり、川や用水路に取り付けた羽根のついた芋洗水車で毛をきれいにこそぎ、砂糖と醤油を入れて火にかけ、煮汁がなくなるまで1時間ほど煮る。



写真1 芋洗水車
(大野市史・民族編 p.44)

2. 越前大野の神社とお清水

越前大野の神社の名称を見ると、34社のうち12社が「白山神社」で、「飯降白山大観音」を合わせると、13社で4割近くに当たる。ついで、八幡神社が3社ある。これは、全国に分布する神社で、大分県宇佐市の宇佐神社を総本社とする神社と考えられる。その他、春日神社、天満神社、熊野神社など、全国的に立地する神社が各1社ずつある。その他は、地物と地名による神社である。

大野市の市街地地図に、国土地理院地形図に示されている神社34社と、お清水の場所を示した地図を作成した。

ここの地図に、地下水の解析図（国土交通省、水循環解析モデルによる大野盆地の地下水の流れ）を重ね合わせた（図1）。地下水の解析図では、濃い青色のところが地下水の流れが深く、薄いところは浅いことを示している。この図から、大野の旧市街地（城下町）は、地表面から近いところを地下水が流れている所に立地していることがわかる。この地下水が湧き出ているところがお清水となっていて、そこから水路を通して上水の整備が行われたのであるから、当然と言える。清水の位置をみると、城下町周辺、あるいは南側、川上方向に点在している。

では、神社の分布をみてみよう。大野の神社をその立地する場所の地形から見ると三種類に分けることができる。

- ①盆地の平地、農地の中にある神社、集落に紐づく
- ②山の際、斜面地の高台にある神社
- ③市街地にあり、お清水の近くにある神社

滋賀県の野洲川流域における神社の立地特性に関する既往研究²では、神社の立地を類型化し、8つのタイプに分けている。

- A) 神体型；山頂部にあり、山が信仰の対象、雨乞いの対象となり、水源・司水。
- B) 里宮型；神体型の遥拝所となる。
- C) 水分型；平野部に流れ出る水口部にあり、水源管理。
- D) 川守型；河川の合流点など、河川が神社境内を形成。
- E) 鎮水型；水難からの守護、鎮水。
- F) 灌漑型；水源地付近。御手水などに利用。
- G) 湊型；港に隣接する。
- H) 谷地田型；棚田に立地する、豊穰祈願の神社。

この類型に、越前大野の神社を当てはめると、

- ①盆地の平地、農地の中にある神社、集落に紐づく・・・里宮型（白山信仰）
 - ②山の際、斜面地の高台にある神社・・・水分型
 - ③市街地にあり、お清水の近くにある神社・・・灌漑型
- と言える。

² 嶋田奈穂子、山根周、滋賀県野洲川流域における神社の立地特性に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第75巻 第647号、111-118、2010年1月

神社と清水
MAP
S=1:25000

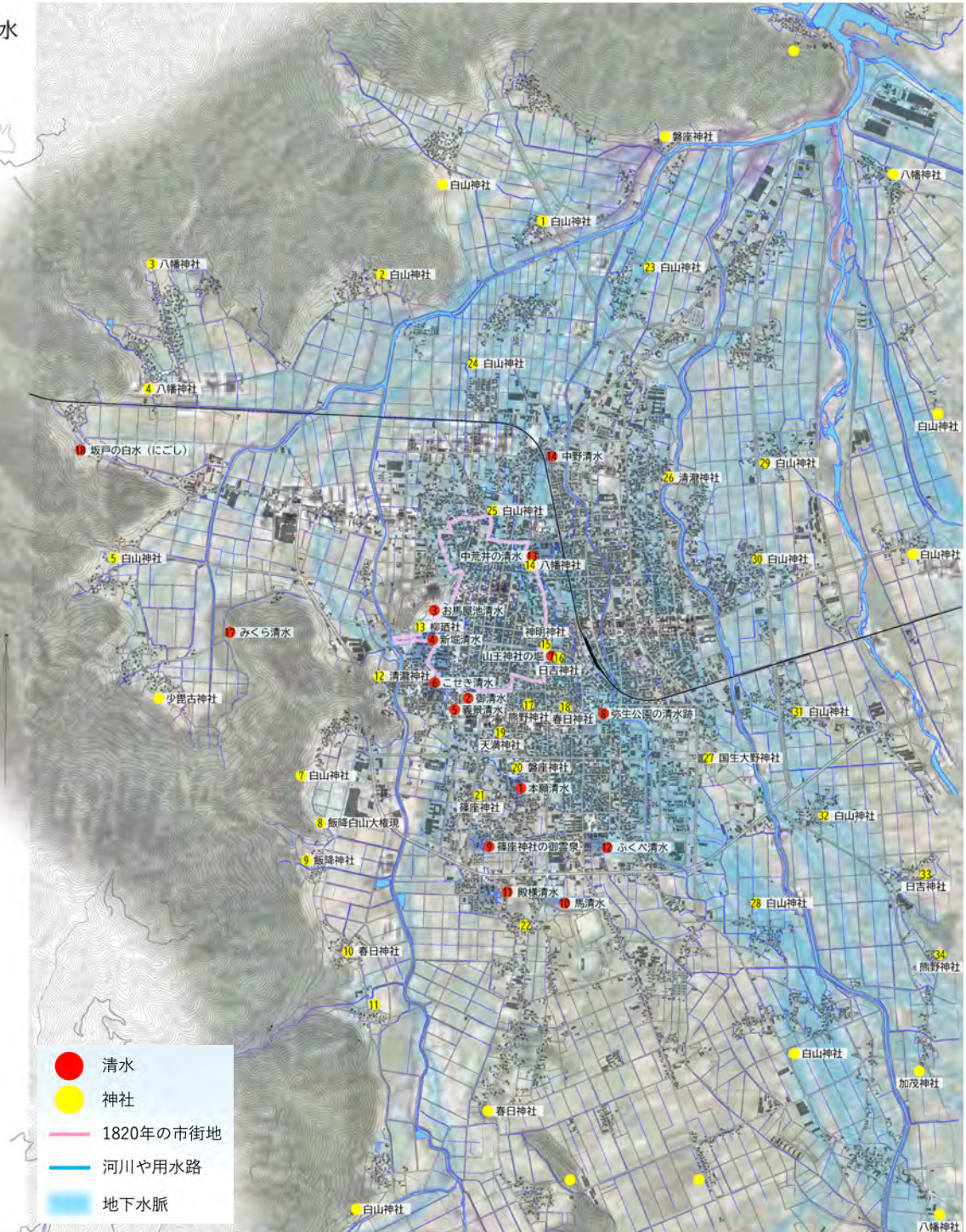


図1 大野市市街地における神社と清水の分布および地下水解析図
(関西大学住環境デザイン研究室にて作成)



図2 大野市市街地における神社の分類

図2に神社立地による分布を示す。それぞれについて、事例を示す。

3. 神社立地類型ごとの事例

(1) 里宮型神社

盆地の平地、農地の中にある神社、集落に紐づく神社である。



図3 里宮型神社の立地

<事例1 白山神社>

所在地；大野市中津川久保田 17

村社である。境内に、雨ごいの池がある。

この雨ごい池は、「越前若狭の伝説」によると、

——今はこの池に水がない。昔から、この池をあらかしたり、掃除したりすると、雨が降ったと伝えている。雨乞いの時は池の掃除をする。——

とある。



図4 白山神社の立地の様子



図5 白山神社の拜殿と雨ごい池

(2) 水分型神社

山の際、斜面地の高台にある神社である。水が湧き出るところに神社が造られる。

<事例2 春日神社>

所在地；大野市深井 27-43

山際の高台にある神社である。周囲に集落がある。

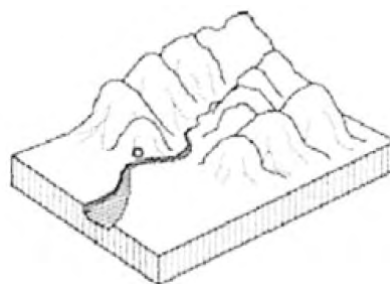


図6 水分型神社の立地

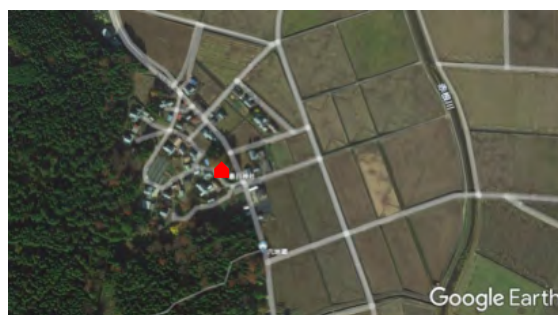


図7 白山神社の立地の様子



図8 白山神社の拝殿

(3) 灌漑型神社

市街地にあり、神社が灌漑水源付近に立地する。
地下水が出ている湧水のある神社で、湧水池・ため池
が境内にあることが多い

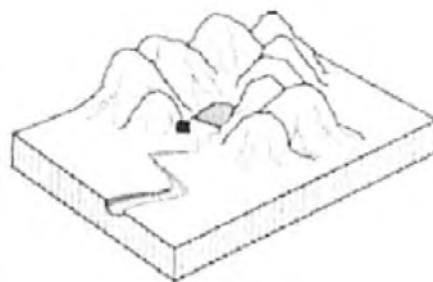


図9 灌漑型神社の立地

<事例2 篠座神社>

所在地；大野市篠座 42-5

境内に池があり、また御霊泉がある。

水が豊富な地区に位置する篠座神社には、牛ヶ原にあ
った三社神社から夢のお告げによって「弁財天
女」が移された。また、篠座神社の参道の延長
は飯降山へと続いている。



図10 篠座神社の立地の様子



図11 篠座神社の拝殿



図12 境内の池にある御霊泉



図13 境内案内図

4. お清水のある暮らし・今昔

灌漑型神社と、お清水の立地を図 14 に示す。この様に、お清水と共に神社が立地している。

お清水ではどのような暮らしぶりがみられたのか、かつての写真を参考に振り返ってみる。

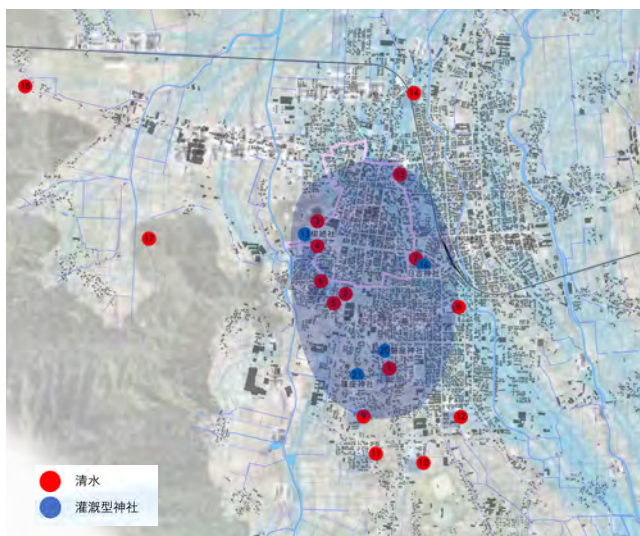


図 14 灌漑型神社とお清水の分布

図 15 は昭和初期の本願寺御清水と現在の御清水である。昭和当時の清水は柵などで仕切られておらず、周辺道路との高低差があまりなく、水面の見える面積が広いため、物理的に人と水の距離が近く感じる。現在の清水は屋根が設けられ、柵やガードレールで仕切られ、看板が立っているおり、観光地としての印象を受ける。



昭和初期の御清水
出典『大野紹介写真帳』

現在の御清水
出典『本願清水イトヨの里開館10周年
記念「越前おおの」の湧水』

図 15 本願寺清水の今と昔

図 16 は新堀清水の昭和 30 年代の時と現在の様子である。道のガードレールで囲われ、閉鎖的に見える。



昭和30年代の新堀清水
『ふるさと大野今昔物語事業収集写真』

現在の様子

図 16 新堀清水の今と昔

今は、お清水が人々の生活から離れてしまい、観光のための施設になってしまっている様に見える。かつては、人々の暮らしの中心にお清水があった。

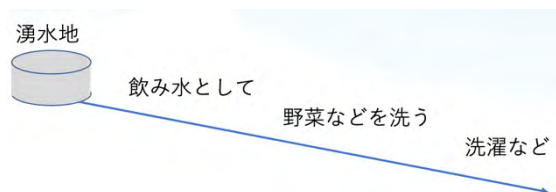


図 17 湧水池と暮らしのシステム



図 18 お清水での洗濯の様子



かつての義景清水の様子
本願清水イトヨの里にて撮影



かつての義景清水の様子
本願清水イトヨの里にて撮影

昭和34年頃、本願清水湧水地で遊ぶ子供たちの様子
出典『ふくいのおいしい水（写真提供：大野市）』

図 19 かつての清水の人々の姿



図 20 最高の贅沢・紐で瓶を吊るしてビールを冷やし、そして飲む
出典『ふくいのおいしい水（写真提供：大野市）』

5. 水路のある暮らし今昔

かつて、道にあった上水路について、今と昔を比較してみよう。車社会が始まると、通りの中心に流れていた上水路を埋めて、今の道路法に合わせて、道路の淵に水が流れるようになった。自動車の登場に代わって無くなったシステムだが、当時の普段通る道沿いに清流が流れているという風景は大野市の人たちの原風景になっていた。

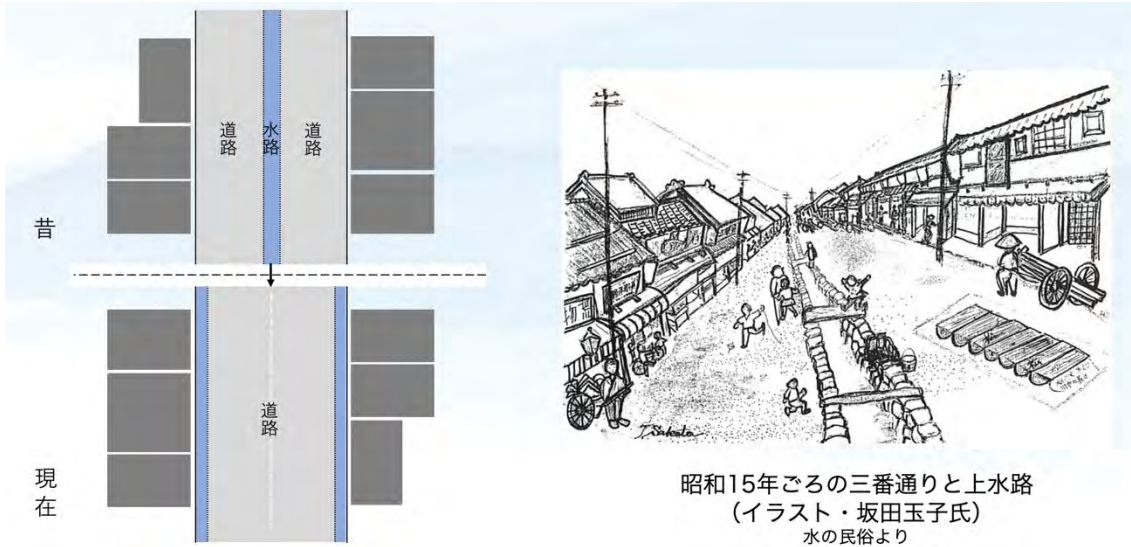


図 21 水路のシステムとその思い出



図 22 一番通りの様子・今昔



出典『水の民俗』



現在の様子

図 23 三番通りの様子・今昔



出典『水の民俗』



現在の様子

図 24 五番道路の様子・今昔

さいごに

神社と水との関係を調べている中で、越前大野の人々の暮らしが、昔から水を中心に行われていたことがよく理解できた。神社の立地は、地下水との関係から決まっており、また、清水より得た貴重な水は、人々の生活にとって、貴重な上水であっただけでなく、そこでの人々の生き生きした姿に、豊かさを感じた。残念ながら、現在は水路がなくなり、清水では人々が楽しく集まる光景が全く見られなくなっている。私たちは、知識として清水に行き、かつてこうだったんだとその場所のかつての使われ方を教わることになる。また、通りを歩いて、ここに水が流れていたのだと想像する。

大野盆地の地形から生まれた、水と関わる暮らしは、これまでの人々の原風景であったし、今後もそうあって欲しいと考える。水路や清水で人々が集まる暮らしを取り戻すことができれば、と考えている。清水の場所を確認するだけでなく、人々が集まりたくなる場所として、整備する方向はないだろうか。

奈良県の大和郡山市では、染物屋が並んでいた紺屋町に、お城の堀から流れ出た水路が今でも道路の中央を流れている。これが観光資源となり、町に賑わいを作り出している。交通量も少なくなったのだから、このような水路の復活はできないだろうか？ 清水に人々が集まる場が作れないだろうか。

ぜひ、来年度は飲み物を持って清水に行き、そこで大野の人々と共に、楽しい時間を過ごしながら、新しい清水の整備の方向を考えたい。

(了)



図 25 大和郡山 紺屋町の水路